

現状把握

2013年4月に全面实施となった新課程には、生徒に「主体的に学習に取り組む態度を養う」ことが盛り込まれている。また、多くの大学や企業が、高校生や大学生が社会に出る際に備えていくべきものとして「主体性」を挙げている(図1)。しかし、生徒の主体性が十分に育成できているかという点、必ずしもそうとは言えない。図2や図3を見ると、学校段階が進むにつれて、学習への取り組みが消極的になり、将来の職業への夢が持てなくなっていくことが分かる。

本誌12年度8～2月号の特集では、生徒の主体性を育むにはどのような指導が必要なのかを考えてき

図1 社会人として必要性が一層高まるもの

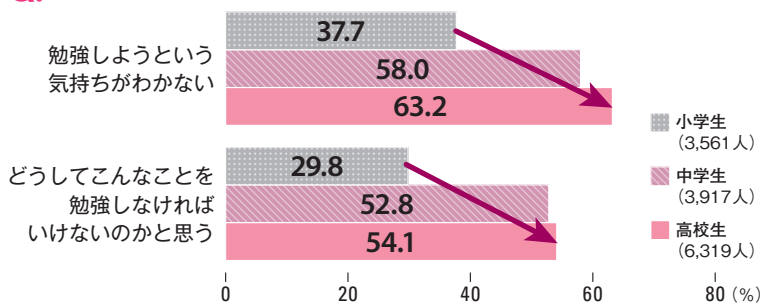
Q. 現在の高校生や大学生が社会人になるに際し、「人間力の要素」の中で、「これまで以上に備えていることを特に重視すべきもの」を1つ選んでください。

	大学	企業
1位	主体性	主体性
2位	グローバルな視点	積極性
3位	誠実さ	グローバルな視点
4位	積極性、協調性、倫理観	突破力
5位	—	協調性

注) 調査では、「人間力の要素」「知識・能力の要素」「体験的要素」に分けて尋ねた。「人間力の要素」全16項目のうち、上位5つを掲載
出典/産経新聞社、駿台教育研究所「『時代が求める人材像』に関する調査結果」(2012)

図2 学習に取り組む意識

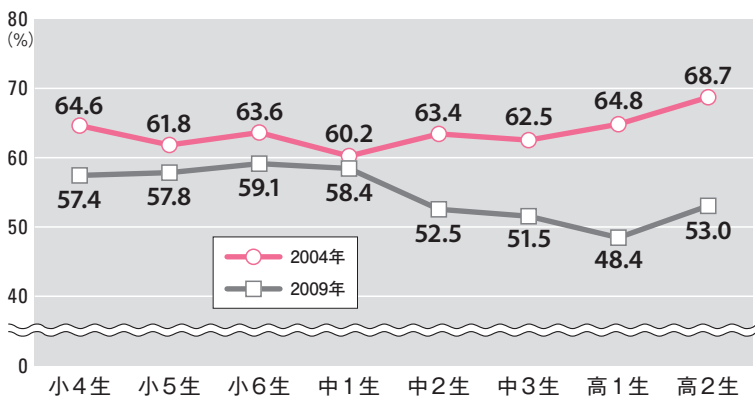
Q. あなたは勉強の取り組み方について、次のようなことがあてはまりますか。



注) 「とてもそう」+「まあそう」の%
出典/Benesse 教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2009)

図3 将来なりたい職業の有無

Q. あなたには、将来なりたい職業はありますか。



注) なりたい職業が「ある」と回答した%
出典/Benesse 教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2009)

新課程という環境変化を、生徒の主体性を育むチャンスとするには、学習指導要領の改訂の基本的な考え方や教育内容の改善事項をどのように捉えればよいのか。主体性を育む指導のあり方と新課程のポイントを改めて整理する。

生徒の主体性を育むという視点で 新課程を捉え直す

た。8月号では、環境変化の激しいこれからの社会を生きる力の土台となるのが「主体性」であり、それを育むための指導のあり方について、大学生と社会人、そして教師の声から考えた。更に、指導のヒントを得るために、10月号では授業におけるデジタル機器の活用、12・2月号ではグローバル化社会における生き方を取り上げた。

大学生や社会人、教師からは、生徒の主体性を育むための指導についてさまざまな提案があったが、それらは大きく4つに整理できる(図4)。

1つめは、授業や家庭学習、部活動、学校行事において、試行錯誤や失敗経験を積ませること。2つめは、「社会の役に立ちたい」という社会貢献意識を芽生えさせ、その気持ちを行動に移させること。3つめは、生徒の学びと教師の指導においてデジタル機器を活用することで、生徒の「分かる」「出来る」を増やし、学ぶ喜びや楽しさを感じさせること。そして、4つめは、教師が生徒の心の声と向き合い、対話を重ね

図4 本誌2012年度8~2月号の特集で見えてきた、生徒の主体性を育むための指導のキーワード



生徒の主体性を育むための指導の観点

- 失敗して立ち直るプロセスを評価する、失敗からどうやって学ぶかを考えさせる [8月号]
- 生徒を余裕のある状態にしないよう、各教科が自信を持って生徒に課題を与え、どんどん勉強させる。そうすれば、生徒はどうしたら与えられた課題をこなせるかを考える [8月号]
- 生徒は、自分が頑張れた場所だから、地域に戻ってくる。だとしたら、教師が授業や部活動で一生懸命生徒にかかわることが、地域への愛着を育むことにつながる [12月号]
- あの時、自分の考えを英語で話せたら、もっと話が盛り上がって楽しかったのに……といった学習の必要性を認識させる出会いをつくる [2月号]
- 現実の社会が直面している課題を授業の中で考えさせ、学問と現実社会の課題が結び付いていることを生徒に伝えられれば、今学ぶことも社会貢献なのだと思える [8月号]
- 社会の役に立ちたいという思いを秘めた生徒が、自分には何が出来るのかをとことん自分に問い掛ける機会をつくる [12月号]
- クラスでの人間関係を通して、「他者のために」という意識が育った生徒は、他の人のために時間を使おうとする [2月号]
- クラスで意見をまとめる時にパソコンを使うなど、ちょっとしたことが、変化に対する抵抗感をなくし、興味を育てる [8月号]
- デジタル機器を利用して、自分に必要な情報を探し出し、解決をするという学習の枠組みをつくる [10月号]
- ツイッターなどを指導に活用して、生徒と世界をつなぎ、自分の考えを発信したい、自分と違う意見を聞きたいという欲求を満たしてあげる [2月号]
- デジタル機器の活用により、指導の一部が効率化されることで、生徒が考える活動や、教師が生徒にかかわることに時間を充てられる [10月号]
- 授業を通じた生徒と教師の対話。教師自身が視野を広げ、生徒の見いだした価値と真摯に向き合い、対話する [12月号]
- 教師が世界の動きをつかむアンテナを持ち、世界の動きが自分たちの生活にどう影響するかを生徒に語る [2月号]

試行錯誤
失敗経験

社会貢献意識の
芽生え・向上

デジタル機器
の活用

教師と生徒、
生徒同士の対話

主体性を育むための指導のキーワード

ていくことである。

そのような指導を新課程において行う時に、各教科では具体的にどのような指導が考えられるのか。

改めて高校の新学習指導要領のポイントを整理してみよう(図5)。「生きる力」の育成、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成、そして、豊かな心や健やかな体の育成などの改訂の基本的な考え方の下、国語を始め各教科で批評、論述、討論などの言語活動を充実させることや、理数教育を充実させること、そして、「授業は英語で行うこと」を基本とした外国語教育の充実などが、教育内容の主な改善事項として挙げられている。

しかし、これらの改善事項を取り入れて指導を行うことには、課題もある。図6は、新課程先行実施生である12年度の1年生を指導した教師に、生徒の特徴や傾向について尋ねた結果をまとめたものだ。「中学校で学習した知識」や「高校の学習内容に関する理解」そして「家庭(校外)での学習習慣」の定着度が、「低下した」または「格差が広がった」と約3割の教師が感じている。更

図5 高校の新課程の主な改善事項

改訂の基本的な考え方

- 生きる力の育成
- 知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成
- 豊かな心や健やかな体の育成

主な改善事項

- 言語活動の充実
- 理数教育の充実
- 外国語教育の充実

国語

必修教科目

- 現行の選択必修から「国語総合」の共通必修に変更

科目構成

- 「国語表現I」及び「国語表現II」の内容を再構成し、「国語表現」とするとともに、「現代文A」を新設

主な改善事項

- 言語に関する能力を育成する中核を担う教科であることを踏まえ、社会人として、また各教科等における学習に必要な能力を身に付けるため、討論、説明、創作、批評、編集などの言語活動を充実(言語活動例を「内容の取扱い」から「内容」に移し、記述を具体化)
- 我が国の伝統と文化に関する教育を充実するため古典に関する指導を充実

地理歴史科・公民科

必修教科目

- 旧課程から変更なし

科目構成

- 旧課程から変更なし

主な改善事項

- 従来の方針を継承しつつ、「思考力」や「表現力」を重視。各科目で、課題を探究する学習が項目として設けられると共に、地図や年表を始めとする各種資料の活用、論述・討論などの言語活動を重視
- 必修科目である世界史は、地理や日本史にかかわる内容を充実

数学

必修教科目

- 現行の選択必修から「数学I」の共通必修に変更

科目構成

- 現行の7科目構成を、6科目構成に再編。数学の具体的な事象への活用を重視した「数学活用」を新設すると共に、「数学C」の内容はその系統性などにも配慮し、他科

目へ移行

主な改善事項

- 教科目標で「数学的活動」を一層重視し、「数学的活動」の配慮事項を新たに規定
- 中学校との接続や内容の系統性を一層重視
- 知識・技能を活用する力を育成し、数学のよさを認識させるため、「数学I」及び「数学A」の内容に「課題学習」を位置付け
- 統計に関する内容を充実し、統計活用力を育成

理科

必修教科目

- 物理、化学、生物、地学のうち3領域以上の科目を履修する場合には、総合科目の履修を不要とし科目履修の柔軟性を向上

科目構成

- 各領域ごとに3単位科目が2科目であったのを、2単位科目と4単位科目に再構成すると共に、「科学と人間生活」及び「理科課題研究」を新設

主な改善事項

- 科学に対する興味・関心を高めるため、人間生活とのかかわりの深い内容を扱う「科

学と人間生活」を新設

- 探究的な学習を重視する観点から、「物理」「化学」「生物」「地学」に新たに探究活動を導入すると共に、「理科課題研究」を新設
- 中学校との関連を図る観点から、「物理基礎」「化学基礎」「生物基礎」「地学基礎」においては、「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」などの科学的な見方や概念を踏まえて内容を構成
- 「物理基礎」「化学基礎」「生物基礎」「地学基礎」においては、日常生活や社会との関連を重視。「物理」「化学」「生物」「地学」においては、選択して履修していた項目を必修化し、指導内容を充実

英語

必修教科目

- 現行の選択必修から「コミュニケーション英語I」の共通必修に変更

科目構成

- 科目構成を変更し、4技能の総合的な育成を図るコミュニケーション科目、論理的に表現する能力の向上を図る表現科目、会話する能力の向上を図る「英語会話」に再編

主な改善事項

- 指導する語数を充実。コミュニケーション英語I、II及びIIIを履修する場合には、高校で1,800語、中高で3,000語を指導
- 生徒が英語に触れる機会を充実すると共に、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とすることを明記

* 文部科学省「高等学校学習指導要領改訂のポイント」および「高等学校学習指導要領解説」を基に編集部で作成

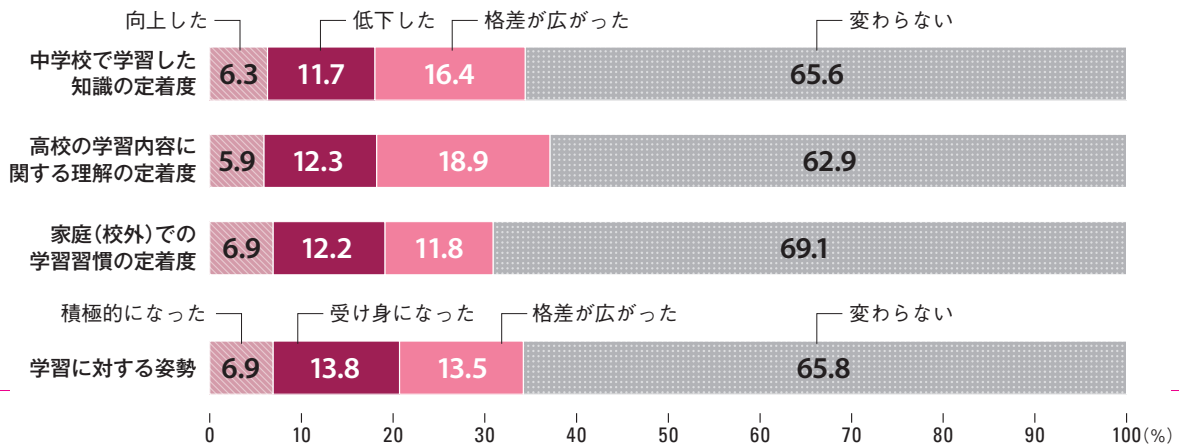
に、「学習に対する姿勢」に関して、「受け身になった」「格差が広がった」と3割近くの教師が感じており、生徒の学習に対する姿勢が消極的になっていることが懸念される。

以上のような課題を解決しながら、生徒の主体性を育む上で生かせる新課程のポイントは、全ての教科に盛り込まれた「言語活動」と、主に数学・理科で重視されている「知識・技能を活用する学習や探究する学習」、そして、それらの前提となる「知識・技能の習得、定着」だろう。これらの指導に、図4で示した生徒の主体性を育むためのキーワード、すなわち「試行錯誤・失敗経験」「社会貢献意識の芽生え・向上」「デジタル機器の活用」「教師と生徒、生徒同士の対話」の要素を取り入れることが出来れば、生徒の主体性を育んでいけるのではないだろうか。

次ページからは、各教科の教師、そして、学校運営の立場から教頭に話を聞き、新課程における主体性を育む指導とは何かを具体的に考えていく。

図6 新課程先行実施生の特徴や傾向

Q. 2012年度の1年生に関して、以下のようなことをどう感じていますか。



出典/ベネッセコーポレーション「新教育課程の指導に関する調査」(2012)

◎調査対象/高校の教務担当の教員、有効回答数:1,857校 ◎調査時期/2012年11~12月 ◎調査方法/郵送による質問調査

各教科の教師へのインタビューから見た 生徒の主体性育成に生かせる新課程のポイント

ポイント1

言語活動

話し合いや討論、発表などを通して、社会にはいろいろな価値基準・判断基準があることを知ることで、考えの幅が広がり、多様な価値観を受け入れられるようになる。それが、物事を主体的に判断する力につながるのではないかと。また、多少の間違ひはあっても生徒の頑張りを評価できるような「問い」を、教師が投げ掛けるなど、教師と生徒の対話を豊かにすることで、生徒が小さな成功体験を積み重ねていけば、前向きに学びに取り組むようになるのではないかと。

ポイント2

活用重視の学習・探究学習

課題学習や探究学習では、当たり前と思っていることを改めて考えさせたり、その教科の学習が必要だと感じられたりするような身近なテーマを設定することが重要だ。更に、自分たちが学んでいることと社会とのつながりを意識させるようなテーマを提示できれば、社会貢献意識が芽生え、主体的な学習態度を引き出せるのではないかと。また、探究活動などの際には、生徒に最低限の手順のみ示すなど、生徒に試行錯誤させる場面を設けることも大切だろう。

ポイント3

知識・技能の習得、定着

言語活動などを効果的なものにするには、前もって一定の知識・技能を習得、定着させておくことが必要である。例えば、理科の実験では、一度知識を体系的に吸収しておけば、どうしてこういう実験結果が出たのかと考えたり、自分なりの工夫が出てきたりして、主体的、創造的に実験に取り組むようになる。なお、知識の理解度を高める上で、デジタル機器の活用が有効な手段の1つとなる。